岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第24号
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.24
51－58, March 2022

報告

大学における世界史教育の現状と課題(3)
―歴史学系のオンライン授業に関する アンケート調査（2020 年度・2021 年度）の結果から―

The Current State and Problems of World History Education at Universities in Japan (3)

鈴木道也[*1]，安井萠[*2]，小川春美[*2]，吉原秋[*3]，小川知幸[*4]，
畑奈保美[*1]，津田拓郎[*5]，田村理恵[*6]，出村伸[*7]，池野健[*8]
Michiya SUZUKI, Moyuru YASUI, Harumi OGAWA, Aki YOSHIHARA, Tomoyuki OGAWA,
Naomi HATA, Takurou TSUDA, Rie TAMURA, Shin DEMURA, Takeshi IKENO

Keywords: *History Education, World History Education, Online Schooling*
歴史教育，世界史教育，オンライン授業

1. はじめに

私たちの研究グループは、2014 年度に「世界史教育と外国史研究との連携・協働に向けた総合研究―岩手県における世界史教育の現状と課題―」のテーマで共同研究を開始した。この研究は、高校における世界史教育の現状と課題を明らかにし、また大学生が世界史教育に期待しているものを確認することで、大学における世界史系の授業を改善するための手がかりや、世界史教育における高大連携の可能性を探ることを目的としていた（吉原ら（2016）、鈴木ら（2016）、吉原ら（2017）、小川ら（2017）、安井ら（2017）、吉原ら（2018）、鈴木ら（2018））。この共同研究を発展させたものが科研費助成事業採択課題「学習者の視点から探る世界史学習の内発的動機づけ―国際的志向性の観点から」［基盤研究（C）2019 年度～2021 年度/研究代表者：安井もゆる（岩手大学）］である。本研究課題では、全国の高等専門学校・短期大学・4 年制大学に在籍する学生を対象にオンライン・アンケート「外国史への関心についての調査」を実施し、11 機関から計 1240 件の回答を得た（2019 年度に 1043 件、2020 年度に 40 件、2021 年度に 157 件）。アンケート結果をもとに大学生の外国史に対する関心がどのような経験や目的意識に支えられているか確認するとともに(小川ら（2020))、アンケートに協力してくれた学生のなかから対象者を選んでより詳細な面接調査を実施し、彼らと外国史とのこれまでの、そして今後の関わり方についてのより掘り下げた分析を行った（小川ら（2021）、小川ら（2022））。

一連の共同研究のきっかけとなったのは 2006 年に発覚した高等学校における必修科目「世界史」未履修問題であったが、共同研究を進めるあいだに高等学校の地歴科はその姿を大きく変えることになった。必修科目だった「世界史」（世界史Ａ［２単位］あるいは世界史Ｂ［４単位］）は、日本史と世界史の近現代史部分を統合した新たな必修科目「歴史総合」［3 単位］と、この「歴史総合」の学習を前提にこれまでの「世界史Ｂ」の内容を教授する選択科目「世界史探求」［3 単位］に再編された。

2022 年度からの「歴史総合」、そして翌 2023 年度から始まる「世界史探求」の授業がどのように実践され、それらが高校生の世界史認識にいかなる影響を与えていくかということは、大学における世界史教育の在り方を考えるうえでも重要であり、今後生じてくるであろう様々な変化の方向性を迅速かつ正確に捉え、大学教育の側も柔軟に対応していく必要がある。

しかしながら、2020 年における新型コロナウィルス感染症の世界的な流行、対策としてとられた日常生活への大きな制限、その結果として社会・文化・経済の各分野で生じている甚大な影響、いわゆるコロナ禍は、大学教育の姿を短期間で劇的に変え、開講されるほぼすべての授業科目にオンラインでの教育活動が導入されることとなった。これまで当たり前に行われてきた対面授業は、いまでは感染状況が落ち着いている時期に感染対策を徹底することで初めて実施可能な、特別な授業形態となっている。

大学教育の「正常化」に向けて 2022 年度の授業は原則対面とするなどの基本方針をすでに示しているところもあるが、オンライン授業が 2 年近く教育活動の中心となっている大学もあり、そうした大学では、今後コロナ禍が収束したとしても、2019 年度までと同一内容・同一方法の対面授業に戻すことは難しいだろう。

したがって大学での世界史教育に関しては、「歴史総合」や「世界史探求」を意識しながら授業展開を構想・実践するという内容面での課題に加えて、オンライン授業の経験を通して得られた様々な知見を今後の授業にどのように組み込んでいくかという教育方法上の課題も生まれているように思われる。

そこで本報告では、ここまで進めてきた共同研究の内容や方向性とはやや異なるが、2020 年の 10 月および 2021 年の 11 月に実施したオンライン授業に関するアン

*1 東洋大学、*2 岩手大学、*3 国際文化学科、*4 東北大学、*5 北海道教育大学、*6 都城工業高等専門学校、*7 東北学院大学、*8 日本学生支援機構

ケート「歴史学系授業のオンライン化に関するアンケート」の結果を紹介し、かかる課題についてささやかな検討を行ってみたい。

2. アンケート調査の結果

2-1. 調査対象と質問項目

アンケート調査の対象は、東洋大学文学部史学科に所属する学部3年次の学生である。東洋大学は首都圏に位置する大規模私立大学のひとつである。文学部史学科は1学年の定員が133名で、2年次から日本史、東洋史、西洋史の3専攻に分かれる。各専攻に定員や受入条件はなく、学生は自分が希望する専攻に進むことができる。専攻ごとの学生数は年度によって異なるが、その割合はおおむね日本史65%、東洋史５%、西洋史30%である。学科の基本的なカリキュラムは、1年次に初年次教育科目として「歴史学研究法」を、また概説科目として日本史・東洋史・西洋史の各「概説」を履修し、専攻が確定する2年次以降は、専攻ごとに開設されるより専門的な「史料研究」「特講（特殊講義）」「演習」を履修する。学生選抜の方法は推薦入試、個別入試、センター利用入試と多様であり、面接のみで入学する学生もいれば、センター試験で国語、英語、地歴に加えて数学を含む4教科を受験してくる学生もいる。実習を含む所定の単位を修得すれば、中学校教員1種免許状（社会科）と高等学校教員1種免許状（地歴と公民）および博物館学芸員資格の取得が可能である。

なお、東洋大学では、2020年度の春学期はすべての授業がオンラインで実施され、秋学期は演習など一部の授業に関して3週間に１回程度対面形式の授業が行われた。2021年度の春学期は、大規模講義は基本的にはオンラインで、また演習など比較的少人数の授業は対面とオンラインを隔週で実施する方式で始まったが、感染状況が悪化した5月には、対面を予定していた多くの授業がオンラインに切り替えられた。2021年度秋学期は年度当初の方針に沿って少人数の授業は隔週で対面授業を行い、さらに2011年11月からは希望する場合には対面授業を毎週実施することも認められた。

アンケートは、史学科3年次必修科目である「歴史学概論」（秋学期開講・2単位）の授業時間内に、ToyoNet-Aceと呼ばれるWEBベースの授業支援システムを利用して、2020年度と2021年度に２回実施した。2020年度は本報告執筆者の一人である鈴木が授業担当者であったため授業時間内に一定の回答時間を設定した。2021年度は別の授業担当者にアンケート調査への協力を依頼し、履修学生からは授業時間外に任意で回答を得た。調査対象者の属性と学修履歴は2020年度と2021年度で共通するが、2020年度調査の時点では教員も学生も不慣れなオンライン授業を１セメスタ経験したところであり、2021年度調査の時点では教員・学生ともにすでに3セメスタのオンライン授業経験を有している。2020年度の回答者数は、履修者139名中120名であったが、2021年度は授業時間外に任意での協力を求めたため回答率は大きく低下し、回答者数は履修者143名中33名にとどまっている。

アンケートの質問項目は以下の通りである。

******

春学期に受講した非対面形式の授業のうち、歴史学系の授業（〇〇史概説、〇〇史学特講、〇〇史学演習、〇〇史学卒論演習、地域史、歴史の諸問題など）に関して、以下の質問にお答えください。歴史学系の授業を複数受講している人も多いと思いますので、そのなかから１つもしくは複数の授業を選んで回答してください。最大で３つの授業について回答することが可能です。

問１：授業の種類は何ですか

①概説
②特講
③演習
④卒論演習
⑤基盤教育科目

＊概説：史学科の学生を対象に日本史・東洋史・西洋史の基本的な事項を講義形式で教授する授業科目。主に１年次に履修

＊特講：担当教員が自らの専門領域に沿ってテーマを設定し、史学科の学生を対象に講義形式で実施する授業科目。２年次以降に履修。

＊演習：内外の研究文献や一次史料の講読を行う授業科目。２年次以降に履修。

＊卒論演習：文献調査や卒論構想報告など、卒業論文の作成に必要な各種の活動を行う授業科目。３年次と４年次に履修。

＊基盤教育科目：歴史学を中心に学際的な研究の動向も意識してテーマを設定し、全学部の学生を対象に講義形式で実施する授業科目。

問２：この授業の春学期の授業形態はどのようなものでしたか（複数選択可）

①時間割の時間帯にzoom、Webexなどを活用して動画が配信され、ライブで授業を受講するタイプ：ライブ配信方式

②ToyoNet-Aceなどを使って課題や講義資料（動画や静止画も含む）が配信され、課題や意見などを期日までにToyoNet-Aceで提出するタイプ：オンデマンド方式

③メールにより課題や講義資料（動画や静止画も含む）が送られてきて、締め切り日までに、課題や意見などをメールで提出するタイプ：課題送付方式
④その他
＊zoom、Webex：Web 会議システム。東洋大学では Cisco 社が提供する Webex Meetings を標準で利用している。
＊ ToyoNet-Ace：クラウド型の教育支援システムで、課題管理、情報発信、ポートフォリオの機能を持つ。株式会社朝日ネットが提供する〈manaba〉サービスを利用している。

問３：上の設問で「④その他」を選んだ人は、その具体的な内容を記してください
問４：すべての授業が対面形式で実施されていた 2019 年度までと比べ、上で選択したような授業形態で受講したことでよかったと感じた点はありますか。
①ある　②ない
問５：上の問いで「ある」と答えた人は、どのような点でよかったのか、具体的に記してください（自由記述）。
問６：すべての授業が対面形式で実施されていた 2019 年度までと比べ、上で選択したような授業形態で受講した際に、以前よりも不満を感じた、あるいは改善した方がよいと感じた点はありますか。
①ある　②ない
問７：上の問いで「ある」と答えた人は、どのような点で不満あるいは改善すべきと感じたのか、具体的に記してください（自由記述）。
問８：この授業を含め、歴史学系の授業科目におけるオンライン授業全般をその他の分野（例えば人類学や社会学）のオンライン授業と比較したとき、違いを感じた点はありますか。
①ある　②ない
問９：上の問いで「ある」と答えた人は、どのような点で違いを感じたのか、具体的に記してください（自由記述）。

2-2. オンライン授業の形態

問１から**問７**までは複数回の回答が可能で、1 人の回答者が最大で３つの授業について回答することができる。2020 年度調査における総回答数は 222 件（回答者数 120 名）、2021 年度調査での総回答数は 44 件（回答者数 33 名）であった。

学生が評価対象として取り上げた授業と開講形態は以下の通りである。

問１	2020 年度	2021 年度
①概説	2	5
②特講	53	8
③演習	100	16
④卒論	62	15
⑤基盤	5	0

問２	2020 年度	2021 年度
①のみ	85	34
②のみ	87	3
③のみ	9	0
①と②	31	4
①と③	2	1
②と③	3	1
①、②、③	2	1
④	3	0

2020 年度調査では、ライブ配信方式（①）とオンデマンド方式（②）の授業がほぼ同数で、次いで２つの方式を組み合わせた授業（①と②）が行われている。東洋大学ではコロナ禍以前から ToyoNet-Ace と呼ばれるクラウド型の教育支援システムを導入している。このシステムを活用すればオンデマンド方式で授業を実施することは比較的容易であったが、オンライン授業開始当初から多くの教員がライブ配信を積極的に試みていたことが分かる。「④その他」を選んだ学生が具体的に記している授業内容は、「Facebook を利用して毎週動画が配信され、その後小テストをやる形式」、「自身の関心のあるテーマに沿ってグループごとに決められた期日に参考文献の要約を提出するもの」であった。

2021 年度調査の時点では、大学側の方針もあり、オンライン授業は基本的にはライブ配信方式で行われるようになっている（①34 件は全体の 77.3%）。かかる形態で実施されたオンライン授業への評価を示すのが**問４**への回答である。

2-3. オンライン授業への評価

問４	2020 年度	2021 年度
よかった点が**なかった**	38（17.1%）	8（18.2%）
よかった点が**あった**	184（82.9%）	36（81.8%）

2020 年度調査・2021 年度調査のいずれにおいても、オンライン授業に対する学生たちの評価は高い。授業形態別にみると、2020 年度調査で「よかった点があった」する授業はライブ配信方式では 77.4%（85 件中 66 件）、オンデマンド方式では 86.2%（87 件中 75 件）となり、オンデマンド方式の方がやや評価が高くなってい

る。さらに回答を講義科目（**問１**の選択肢①概説、②特講、⑤基盤）と演習科目（**問１**の選択肢③演習と④卒論演習）に分けて集計し直すと以下のようになる。

〇講義科目の場合

	2020 年度(計 60 件)	2021 年度(計 13 件)
なかった	12（20.0%）	0（0.00%）
あった	48（80.0%）	13（100.0%）

〇演習科目の場合

	2020 年度(計 162 件)	2021 年度(計 31 件)
なかった	26（16.0%）	8(25.8%)
あった	136（84.0%）	23(74.2%)

オンラインで実施された歴史学系の授業に関しては、授業の形態や種類を問わず非常に高い評価が与えられているといえるだろう。とくに 2021 年度調査では、講義科目に関してはすべての学生がオンライン形式を評価している。では、どのような点が評価されているのであろうか。**問５**への回答を、内容が共通するものをひとつにまとめ、2020 年度調査で件数の多かったものから順に示すと以下のようになる。

・自分の都合に合わせて授業や課題に対応することができた（2020 年度 57 件、2021 年度 9 件）
・史資料が豊富に提示され見やすかった（2020 年度 21 件、2021 年度 0 件）
・移動時間がなくなった（2020 年度 20 件、2021 年度 11 件）
・教員との意見交換が容易になった（2020 年度 18 件、2021 年度 1 件）
・対面授業とほとんど変わらずに受講することができた、あるいは対面授業以上に受講しやすかった（教員の声が聞きやすい、など）（2020 年度 17 件、2021 年度 6 件）
・落ち着いて発表することができた（2020 年度 7 件、2021 年度 2 件）
・他の受講生の言動に惑わされることがなくなった（2020 年度 5 件、2021 年度 2 件）

2019 年度までの対面授業とほとんど変わらない、あるいは史資料などの提示に関しては対面授業よりもむしろ優れていたとする学生が相当数存在している。移動時間がなくなり、自宅や自室など他者に惑わされない静謐な環境で受講できることは学生にとっては大きなメリットだった。そうした環境の方が発表も落ち着いてできるとする意見もある。史学科は他学部他学科に比べて物静かな学生が多いと感じるときがあるが、こうした学生の気質も影響しているのだろうか。例えば以下のような回答がみられる。

「よかった点は、通信環境と機器があれば場所を問わず受講することができるため、タイトなスケジュールの中でも授業を受けることができるなど、時間を有効的に活用できるようになった点。また、オンライン環境であることで、授業時間内に受講と同時にデータベースや関連文献に目を通すことがしやすくなった点。」（2021 年度）
「オンラインでの報告だったため、比較的リラックスして自分のペースでできた。」（2021 年度）
「教室で授業を受けていると、周りからの話し声など雑音が入り、授業にいまいち集中できないことを好ましく思っていなかったのですが、その点オンライン上では静かな場所で授業を集中して聞くことができたため、良かったと感じました。」（2020 年度）

また、少し意外に感じるかもしれないが、対面授業の時よりも教員と受講生の間、また受講生同士の意見交換が容易になったという声もある。

「提出内容について、先生から ToyoNet-Ace の「個別指導」を通じて直接ご助言をいただけたり、提出課題に補足等を書き加えたものをメールで返却していただいたりして、1 対 1 で綿密にやり取りをさせていただけた点がよかったと感じました。」（2020 年度）
「資料が Ace 上に残ったままなので、いつでも資料を確認できること。受講生同士の意見のやり取りは掲示板を用いて行っているのであるが、その際も全員が参加しているので様々な意見や見解を知ることができたと思えること。」（2020 年度）
「発表のために作ったレジュメを Google Drive を利用することで、印刷する手間を省いて他の人に配れた点がよかった。発表に慣れていなかったが、画面越しでの発表であったため、やりやすかった。」（2021 年度）

ToyoNet-Ace を利用して教員に直接問い合わせたり、受講生同士がチームを組んで共同作業の場を立ち上げたりすることはこれまでも可能だったが、実際にはほとんど活用されてこなかった。オンライン授業という新しい授業形態への不安からか、教員側も学生側もあらためてこうした機能に着目し、積極的に利用するようになっている。アンケートを実施した「歴史学概論」の授業に関しても、2020 年度は前年度までとは比べものにならない数の、時には回答の準備にかなりの時間を要する様々な質問が寄せられた。質問の内容はオンライン授業の方法や評価基準に関するものだけではなく、授業で具体的に取り上げた出来事や史資料に関するものも含まれていた。

2021 年度調査でも主な回答は 2020 年度とほぼ共通するが、2020 年度に 21 件確認された「史資料が豊富に提示され見やすかった」という意見は、2021 年度では 1 件もなかった。おそらくこれはオンラインでの史資料提示が定着し、2020 年度は新鮮に感じた学生も 2021 年度にはそれを特筆すべき評価点としなかったためであろう。歴史学系のオンライン授業における史資料の取り扱いに関しては後述する。

コロナ禍により突然の全面実施となったオンライン授業は、教員側の試行錯誤と学生側の真摯な協力の結果として、これまで大学で行われてきた授業の再現にある程度成功したといえる。さらに、いくつかの点ではメリットもあった。しかしこうした好意的な評価に対して、オンライン授業に対する不満や改善点も数多く存在している。

2-4. オンライン授業の課題

オンライン授業を受講することで感じた不満や不安を記しているのが**問 6** と**問 7** への回答である。

問 6	**2020 年度**	**2021 年度（計）**
不満や改善点がない	113（51.4%）	29（65.9%）
不満や改善点がある	107（48.6%）	15（34.1%）

オンライン授業を高く評価しつつも、2020 年度段階では授業の約半数について改善すべき点があるとしている。2021 年度になると、改善点があるとする割合は減少している。回答を講義科目と演習科目に分けて集計してみると以下のようになる。

〇講義科目の場合

	2020 年度(計 60 件)	2021 年度(計 13 件)
ない：	37（61.7%）	10(76.9%)
ある：	23（38.3%）	3(23.1%)

〇演習科目の場合

	2020 年度（計 162 件）	2021 年度（計 19 件）
ない：	78（48.1%）	5(26.3%)
ある：	84（51.9%）	14(73.7%)

2020 年度、2021 年度のいずれにおいても、改善点はとくに演習科目に対して示されている。ここでは**問 5** と同様に**問 7** への回答を整理していくつかにまとめ、2020 年度調査で件数の多かったものから順に示す。

・授業運営に関する不満[授業の進度、資料配布のタイミング、小テストの難易度、成績評価基準、Web 会議システムの操作、など]（2020 年度 25 件、2021 年度 4 件）
・課題量の多さ（2020 年度 18 件、2021 年度 2 件）
・発言しづらい、意見交換をスムーズに行うことができない（2020 年度 17 件、2021 年度 4 件）
・回線の不安定さ（2020 年度 15 件、2021 年度 3 件）
・教員に直接質問することができない（2020 年度 14 件、2021 年度 1 件）

＊「課題量の多さ」は「授業運営に関する不満」に含めることもできるが、件数が多かったため項目として独立させた。

問 4・問 5 への回答からオンライン授業が様々な交流の機会を生み出すことが分かったが、授業が対面からオンラインに移行することで学生と教員の間の、あるいは学生同士の円滑なコミュニケーションが難しくなるのではないかという推測は間違ってはいない。充分に意見交換を行うことができない学生たちのもどかしさが現れている回答をいくつか紹介しておく。

「自分の発表がすこし遅れると焦りが出てしまうことや、グループの作業では、自分の作業が十分にこなせていないと思うと、人に迷惑をかけてしまう(と思ってしまう)ことが精神的重圧になった。」（2020 年度）

「対面でないことで、聞きたいことや指導して欲しいことを直接聞くことができず、途中で何をやればいいのか分からなくなってしまった。」（2021 年度）

「春学期は対面時のようにレジュメを作成して発表する機会がなく、史料研究のような授業内容になっていたので、発表という形で大勢の人前で話すことに慣れるためにも、演習らしい授業を受けたいと思いました。」（2020 年度）

通信環境の不安定さや課題の量など、授業運営に関する様々な不満は教員・学生の双方がオンライン授業に慣れていくことによって少しずつ解消されていくはずである。実際 2021 年度調査では、改善点があるとする割合は全体としては減少している。オンライン授業が 2 年目に入るなかで、教員側の授業改善も進んでいるように思われる。しかしオンライン授業が定着していくにつれ、学生側の評価基準はより厳しいものとなる。2021 年度に寄せられた改善点のなかには、次のような意見もみられる。

「明らかにオンライン授業の準備が足りていない先生がいる。課題へのレスポンスも何もないだけではなく、掲示板での質問への回答さえない。やる気がなさすぎる。」

「質疑応答など、学生間の双方向のやりとりは授業により充実度に差異があると感じている。全ての演習でオンラインの特性を活かし、授業時間外の掲示板でのや

り取りを活発化させることが改善のために必要であると考える。」

3. 歴史学系のオンライン授業に特有の課題はあるか

3-1. 問8および問9への回答から

問８・問９は、１名につき１回のみ回答が可能である。**問８**への回答は以下のような結果になっている。

	2020 年度	2021 年度
違いを感じた点はない：	63（52.5%）	24（82.8%）
違いを感じた点がある：	57（47.5%）	5（17.2%）

授業のオンライン化に際して歴史学系の授業に特有の傾向があると感じた学生が 2020 年度は半数近くいる。この 2020 年度調査で「違いを感じる」とした学生の**問９**への回答を、まずは歴史学系の授業の〈良さ〉と〈課題〉に分け、次いで回答の内容が共通するものをまとめ、件数が多かったものから順に示す。

〇歴史学系のオンライン授業に感じた〈良さ〉

・ライブ配信が多かった（10 件）
・事前に課題が提示され、また授業では発表の機会が設けられるなど、より対面に近い雰囲気で参加することができた（10 件）
・多くの史資料が提示されていた（5 件）
その他、「理解しやすかった」（１件）、「少人数だった」（１件）、「高校時代に習ったが忘れてしまったことをすぐに調べることができた」（1 件）など。

〇歴史学系のオンライン授業に感じた〈課題〉

・意見交換などの交流が難しかった、あるいは交流の機会が少なかった（8 件）
・図書館を使うことができず、史資料の利活用が困難だった（5 件）
・学生一人ひとりに対応することが難しかった（3 件）
その他、「課題が多かった」（１件）「ライブ配信が少なかった」(1 件)など。

ライブ配信の多さ、またそこでの対話の機会が確保されていることを〈良さ〉としている回答が多いのは、卒業論文の作成指導を目的として専門分野ごとに比較的少人数で開講される「卒論演習」が３年次から始まっており、各担当教員が、オンラインであっても可能な限り従来の授業形態を維持しようと試みたことがその理由であろう。しかしオンラインでの開講にはやはり限界があり、教員から個別指導を受ける機会が減少してしまったことや、史資料の収集作業が困難になってしまったことが〈課題〉としてはっきりと現れているように思われる。

2021 年度に関しては、〈良さ〉であれ〈課題〉であれ、歴史学系の授業に他と異なる特徴を感じている様子はみられない。「違いを感じた」とする少数の回答のなかで印象的なのは「他の受講生と協力することが無いため、対面にこだわる必要がないように感じた」というものである。この学生はもはや授業を対面に戻す必要性を感じていない。もちろんこれは一部であり、同じ問いへの回答のなかには「対面の方が他の人と話し合いもできるため理解しやすいと感じた。対面の方が集中できる」との意見もある。

3-2. 史資料の取り扱いに関して

数はそれほど多くはないものの、2020 年度調査における**問９**への回答のなかで注目されるのは、「多くの史資料が提示されていたこと」を歴史学系オンライン授業の〈良さ〉とし、他方「史資料の利活用が困難であったこと」を〈課題〉とする声である。2020 年度調査では、**問５**への回答のなかでも「教員が提示する史資料が（対面授業時よりも）見やすい」ことをオンライン授業のよい点として挙げている学生が多かった。あらためていくつか紹介しておきたい。

「対面の時は画面が見えないことなどがあったがオンラインだと資料の見落としがなかった。」（2020 年度）
「演習の授業では漢文資料の読み下しと現代語訳に取り組み、適宜一人一人指名されて予習した成果を発表する機会があったので、先生から直接「そこはこんな風に読むといいよ」とご指導いただける点はよかったと感じました。」（2020 年度）
「史料の読解(翻訳)の授業内容だったため、個人でやったものと教授の試訳を比べて自身のペースでできたので比較的やりやすかった。」（2020 年度）
「英文を訳すことがメインの授業だったので、webex のノート機能がとても便利でした。生徒が提出した訳を、教授が必要に応じて即座に訂正し、生徒全員で共有することが出来ました。」（2020 年度）

史資料は歴史の授業を構成する重要な要素であり、効果的に提示・利用することで、学生は対象となる時代や地域に関する具体的なイメージを持つことができる。これまでも教室ではプロジェクターや書画カメラなどを用いて、可能な限り多くの史資料をその細部を含めて紹介しようとする試みがなされてきた。オンライン授業において学生たちは、画面を通してではあるものの、これまでよりも多くの鮮明な史資料を、丁寧な分析とともに体験できているとの感想を抱いており、この点はしっかりとおさえておく必要があるだろう。

これらは日本史を含む歴史学系のオンライン授業全般に対する意見であるが、世界史学習における史資料の取り扱いに関しては、原語を用いるのか、それとも現代語

あるいは日本語の翻訳を用いるのかという点がこれまで議論になってきた。この点に関して、オンライン授業における史資料の利活用という観点から、近年話題となっている機械翻訳にも一言触れておきたい。

「DeepL 翻訳[https://www.deepl.com/ja/translator]」に象徴される近年の機械翻訳（Machine Translation：MT）技術の進歩はいちじるしく、外国語教育を専門とする教員に対する最近のアンケートでも、「MT の活用に断固として反対であるという意見はなく」、「実態、原理、是非などを十分に理解した上で最適な活用方法を見出したいという考え方」を持つ教員が多いとの結果が示されている（山田ら（2021）、大塚（2021））。コロナ禍という外在的な理由によってではあるが、配布史資料が PDF などのデジタル・データになったこと、またすべての受講生が授業時間中にオンライン辞書の利用が可能になったことから、本報告執筆者の一人である鈴木は、ひとつの試みとして、現代英語に翻訳された一次史料の講読を行う 2020 年度開講の一授業（「西洋史史料研究 A」）において、学生に機械翻訳（<みらい翻訳>あるいは<DeepL 翻訳>）の利用を認めた。その結果、多少の誤りを含みつつも機械翻訳によって概ね正確に訳出された訳文を手にした学生たちの史料解釈は、ときに他の史料との比較分析にも踏み込むなど、かなり密度の濃いものとなった。その授業風景は、試訳の作成にほとんどの時間が費やされてきたこれまでとは明らかに異なっていた。その当否についてはもちろん慎重な分析が必要であるが、ここにはオンライン授業のひとつの可能性が示されているようにも感じられる。

4. おわりに

高等教育の現場では、「大学設置基準第 25 条第 1 項等」が規定する「面接授業の特例的な措置」の対象にオンライン授業を位置づけることで、少なくとも 2021 年度中はオンライン授業の弾力的な運用が認められている。これに対して初等教育や中等教育の現場では、感染状況が深刻だった 2021 年秋口までは「非常時に臨時休業又は出席停止等によりやむを得ず学校に登校できない児童生徒について」、「オンラインを活用した学習の指導（オンラインを活用した特例の授業）」が認められていたが（令和 3 年 2 月 19 日付け初等中等教育局長通知）、あくまでこれは例外的な対応とされ、感染状況が落ち着きをみせている現在ではほぼすべての授業が対面形式に戻っている（2021 年 12 月現在）。

オンライン授業が多くのメリットを持つことは多くの教員・学生が実感している。アンケート調査の結果には、そうした実感が具体的な数字となって現れており、また自由記述の内容は、すでにオンライン授業が定着しつつあることを示している。ただし演習形式の授業に関しては、教育支援システムや Web 会議システムが有する様々な機能を駆使してもなお、学生と教員の間の、あるいは学生同士のコミュニケーションには限界がみられたことも事実である。

コロナ禍によって思わぬかたちで明らかになったオンライン授業のメリットのなかには、これまでの対面授業では見過ごされていた、あるいは気づいていたとしても解決困難であるとしてそのままにされていた学修環境に関する課題も現れている。コロナ禍が収まったあと、以前の対面授業に単純に戻る/戻すだけであれば、学生たちからただちに「オンラインの方がよかった」との声が聞こえてくるであろう。

とはいえ、対面授業とオンライン授業の「いいとこ取り」はそれほど簡単な作業ではない。例えば、同じ授業を対面とオンラインのどちらでも受講できるようにするハイフレックス型授業に関して、オンライン授業を対面授業と同期させる同時配信方式の場合、教員はオンラインで参加している学生と教室にいる学生の反応を同時に確認することを求められ、その負担は非常に重い。ハイフレックス型授業では対面とオンラインを同期させず、授業を録画して配信するオンデマンド方式が現時点ではより現実的である。

あるいは、ひとつの授業科目のなかで活動内容ごとに今回は対面授業、次回はオンライン授業（ライブ配信あるいはオンデマンド配信）というように、開講形態を切り替えるという方法も有効かもしれない。しかしその場合には学生の登校日や登校時間を整理し、対面授業とオンライン授業の円滑な切り替えが可能となるような時間割を組む必要がある。そのためには学部学科単位であらかじめ各授業科目の開講形態を確認・調整してカリキュラムを編成する作業が必要となり、カリキュラム編成の担当者が強い主導性を発揮しなければ、そうした時間割の実現は困難である。

それでは、こうした様々な課題を克服し、可能な限り学生側の意向を汲みながらオンラインを活用した授業科目を立てることができた場合、その授業はこれまでと同様、あるいはそれ以上の教育効果をあげることができるのであろうか。

今回のアンケートに協力してくれた学生たちが履修していた「歴史学概論」は、史学科 3 年生の必修科目である。コロナ禍が始まる前、2019 年度の授業も本報告執筆者の一人である鈴木が授業を担当しており、授業内容や評価基準は 2019 年度と 2020 年度で同じである。2019 年度の履修者と 2020 年度の履修者の成績を比較してみると、2019 年度履修者の単位修得者平均得点は 100 点満点で 72 点、2020 年度履修者の単位修得者平均得点は 100 点満点で 73 点と、ほとんど変わりがない。最終試験まで辿り着くことができず途中で履修放棄した学生は、

2019 年度は履修者 136 名中 8 名（5.9%）、2020 年度は履修者 139 名中 5 名（3.6%）であった。15 回の授業をすべてオンラインで実施した 2020 年度の方が履修放棄者の割合は少し低く、もしかしたらここにもオンラインのメリットが現れているのかもしれないが、その差は僅かであり、2019 年度と 2020 年度で学生の成績や履修状況に明らかな違いはみられなかった。この一例だけをもって何か述べることはできないものの、オンライン授業の経験は貴重であり、教室において対面で行うことが基本であった授業の在り方を再考するうえで、多くの示唆を与えてくれるように思われる。

参考文献

吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎（2016）世界史履修に関する短大生の意識調査、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 18 号、59－64

鈴木道也・吉原秋・小川春美・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎（2016）大学における世界史教育の現状と課題(1)世界史学習に関する大学生たちの意識調査、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 18 号、65－71

吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎・池野健（2017）世界史履修に関する学生の意識調査と今後の研究の展望、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 19 号、63－66

小川知幸・吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萠・畑奈保美・津田拓郎（2017）高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 19 号、67－73

安井萠・吉原秋・小川春美・鈴木道也・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎（2017）世界史学習に関する岩手大学生の意識調査、岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第 16 号、93-102

吉原秋・小川春美・マーハー=パトリック・鈴木道也・安井萠・小川知幸・畑奈保美・出村伸・津田拓郎・池野健（2018）世界史教育と外国史研究との連携・協働のための予備調査報告 ： 異文化理解と内発的動機づけの観点から、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 20 号、57－61

鈴木道也・吉原秋・小川春美・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎・池野健（2018）大学における世界史教育の現状と課題(2)世界史学習に関する大学生たちの意識調査、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 20 号、47－56

小川知幸・安井萠・小川春美・吉原秋・鈴木道也・津田拓郎・田村理恵・畑奈保美・出村伸・池野健（2020）外国史学習の動機づけに関するアンケート調査と分析―岩手県を中心に―、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 22 号、57－63

小川知幸・安井萠・小川春美・吉原秋・鈴木道也・津田拓郎・田村理恵・畑奈保美・出村伸・池野健（2021）大学生のライフストーリーから探る外国史学習の動機づけ、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 23 号、65－74

小川知幸・畑奈保美・安井萠・小川春美・吉原秋・鈴木道也・津田拓郎・田村理恵・出村伸・池野健（2022）大学生のライフストーリーから探る外国史学習の動機づけ（続）―擬人化から歴史へ―、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 24 号、41－50

山田優・ラングリッツ久佳・小田登志子・守田智裕・田村颯登・平岡裕資・入江敏子（2021）日本の大学における教養英語教育と機械翻訳に関する予備的調査、通訳翻訳研究への招待 第 23 号、139－156

大塚敬義（2021）各種の独和機械翻訳の出力結果に関する考察（Ⅱ）、湘北紀要 第 42 号、71－76

本報告は、2019～2021 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「学習者の視点から探る世界史学習の内発的動機づけ―国際的志向性の観点から―」（研究課題領域番号 19K02878、研究代表者・安井もゆる）による研究成果の一部である。